

# 甲状腺外科草子 61 承前

## 古文復習：桜の輝き

杉野 圭三

古来、咲き誇るあでやかな花の風情より、散り際の潔さや無常感を詠む歌が多いのも日本人の独特の感性かもしれない。



在原業平

南禅寺

世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし (在原業平 古今和歌集 五三)

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく  
花の散るらむ (紀友則、百人一首三三)

在原業平の桜の歌も、紀友則と同じ心情を描いている。業平がただの遊び人でないことは確かである。



藤原俊成

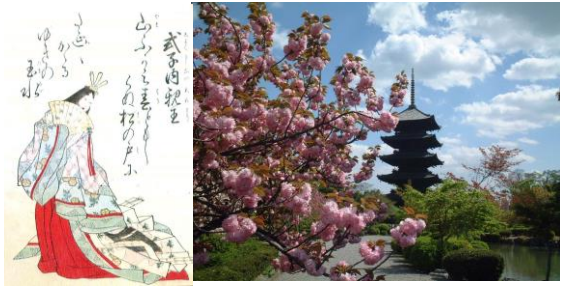
平安神宮神苑

またや見む交野のみ野の桜狩り 花の雪散る春のあけぼの (藤原俊成、新古今和歌集一一四)

藤原俊成 (1114-1204) は長寿を保った大歌人であり、藤原定家の父である。この歌は 82 歳の時の歌である。「またや見む」に深い詠嘆が込められている。享年 91 歳!

式子内親王 (1149-1201) も桜の散る風情を詠んでいる。

花は散りその色となくながむれば むなしき空に春雨ぞふる (式子内親王、新古今和歌集 一四九)、  
式子内親王、享年 52 歳!



式子内親王

東寺

西行は吉野の桜に魅せられ、度々吉野を訪れ多くの歌を詠んだとされる。



西行

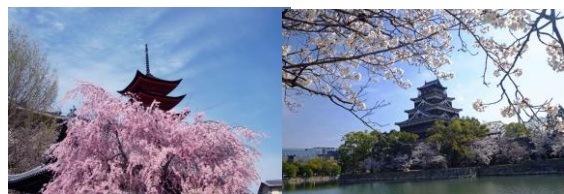
仁和寺鐘樓の枝垂れ桜

吉野山 梢の花を 見し日よりも 添はずなりにき (西行、山家集六六)

最後の歌は辞世ともいうべき歌であり、歌の通り文治六年 (1190) 二月十六日、弘川寺 (河内国) で亡くなった。享年 72 歳! 願わくは花の下にて春死なむ その二月の望月のころ (西行、山家集七七)

藤原俊成には及ばないが、当時の平均年齢を考えると長寿であろう。日本人はよく花見をしながら古の歌を口ずさむ。「ひさかたの～」、「世の中に～」など。

しかし、妻の前で「花の色はうつりにけりな～」だけは禁句である。恐ろしや～!



宮島

広島城

参考資料：百人一首、古今和歌集、新古今和歌集、ピギナーズクラシックス、角川ソフィア文庫、Wikipedia、菱川師宣画 (国立国会図書館蔵)

( 一甲状腺外科医の徒然なる随想 )

2023 年 3 月 24 日